



成人学習者としての特徴を 考慮した授業展開の試み —「基礎看護方法演習(看護過程)」に 焦点を当てて—



吉富 美佐江

Misae YOSHITOMI

看護学部看護学科教授

1. はじめに

教育学者のMalcolm Knowlesは、教育学の知識の多くが「子どもを教育する技術と科学」を意味するペタゴジーと定義され、初等中等教育を受けている子どもを対象としており、ペタゴジーの知識をそのまま成人を対象とした教育に適用することには限界があることを示唆した¹⁾。そこで、成人を対象とした教育のあり方を示し、「成人の学習を支援する技術と科学」を意味するアンドラゴジー(成人教育学)と定義した²⁾。アンドラゴジーは、青年期から成人期に移行するにつれて発達する成人学習者の特徴として、次の5点を提示した^{3) 4)}。①人間

は成熟するにつれて、その自己概念が、依存的なものから自己管理的(self-directing)なものに変化する。②人間は成熟するにつれてより多くの経験を持ち、この経験が学習のための貴重な資源となる。③成人の学習へのレディネス(準備状態)は、社会的な課題や社会的な役割を遂行しようとするところから生じることが多い。④成人の学習への方向づけは、より即時的で、問題解決中心あるいは課題達成中心の学習内容編成がより望ましい。⑤成人の学習への動機づけは、自尊心、自己実現などの内面的なものがより重要になる。

以上は、成人を対象とした教育を提供する際、これらの成人学習者の特徴を理解するとともに考慮した学習支援が求められることを示す。看護学の授業に臨む学生は、中等教育を修了した18歳以上の青年期から成人期

の発達段階にあり、青年期から成人期に移行しており、まさに成人学習者として発達途上にある。看護学の授業を展開する教員は、教育の対象である学生を成人学習者として発達途上にあるという特徴を理解し、その特徴を考慮した授業展開を求められる。そこで、本稿においては、看護学科2年生を対象とした授業科目「基礎看護方法演習（看護過程）」を例とし、学生の成人学習者としての特徴を考慮した授業展開の試みについて論述する。

2 成人学習者としての特徴を考慮した授業展開

授業科目「基礎看護方法演習（看護過程）」は、2年次の必修科目であり、1単位30時間である。授業形態は、講義及び演習である。平成29年度の履修学生数は114名であり、担当教員数は基礎看護学領域の教員6名であった。講義形態の授業は一斉、演習形態の授業は2クラス編成とした。

学習目標は、次の7つである。1) 看護過程の特徴を説明する。2) 看護過程の5つの構成要素を説明する。3) 提示された事例の患者を対象としてアセスメントする。4) 提示された事例の患者を対象として問題を明確化する。5) 明確化した問題1つ以上の看護計画を立案する。6) 立案した看護計画を実施する。7) 実施した看護計画を評価する。

7つの学習目標を達成するための15回の授業内容は、次のとおりである。

学習目標1)を達成するために、「第1回：看護過程とは；1. 看護の目的、2. 看護過程の定義と特徴」について講義を行った。講義の中には、学生が教員の説明を聞くという受動的な学習に加えて、講義にて習得した知識を活用して学生個々がワークするという能動的な学習を取り入れた。具体的には、講義で習得した「看護過程の基盤となる問題解決過程の知識」を活用して問題解決過程の実際を体験することである。学生にとって身近な学習課題となるよう設定を「授業中に眠くなって授業に集中できない学生Aさん」とし、「学生Aさんの立場に立ち、授業に集中できないという問題を解決するための

対策を講じる」ことを個人ワーク課題とした。学生の個人ワーク後、教員が講じた問題を解決するための対策の一例を提示しながら説明した。また、第1回の事後学習課題として、「今、あなたが直面している問題の解決に向け、本日学習した問題解決過程の知識を活用して解決策を講じる。」を提示し、学生にとってさらに身近な内容とした。これらは、成人学習者の特徴のうち、③成人の学習へのレディネス（準備状態）は、社会的な課題や社会的な役割を遂行しようとするところから生じることが多い、④成人の学習への方向づけは、より即時的で、問題解決中心あるいは課題達成中心の学習内容編成がより望ましいという特徴を考慮した授業展開を試みていることを示している。さらに、事後学習課題は、次回の授業の2日前までに提出とし、教員は、学生の記述内容を読み、次回の授業の導入にて、学生が実際に直面している問題や講じている解決策を例として、前回の授業内容の復習を行った。これは、成人学習者の特徴のうち、②人間は成熟するにつれてより多くの経験を持ち、この経験が学習のための貴重な資源となるという特徴を考慮した授業展開を試みていることを示している。

学習目標2)を達成するために「第2回～第5回：看護過程の5つの構成要素；第1段階 アセスメント、第2段階 問題の明確化、第3段階 看護計画、第4段階 実施、第5段階 評価」について講義を行った。講義の中には、第1回と同様に、学生個々が個人ワークするという能動的な学習を取り入れた。具体的には、講義にて習得した看護過程の5つの構成要素の定義や必要な作業に関する知識を用いて、提示された事例の患者を対象として看護過程の各段階を展開した。第3回の学習内容である第1段階のアセスメントの枠組みとして用いる「ゴードンの11の機能的健康パターン^{5) 6)}」の定義や主観的データ、客観的データの知識は、看護過程を展開する際の重要な知識の1つである。そこで、第3回の事前学習課題として、「ゴードンの11の機能的健康パターンの定義、そのパターンに含まれる主観的データ、客観的データについて文献を用いて調べて記述する」を提示した。筆者は、学生が講義中に説明を受けながら習得するという依存的な学習ではなく、講義前に学習課題を達成し、その学習経験を学習資源として自己管理的に学習するこ

とを目ざしてこのような事前学習課題を提示した。これらは、成人学習者の特徴のうち、①人間は成熟するにつれて、その自己概念が、依存的なものから自己管理的 (self-directing) なものに変化する、②人間は成熟するにつれてより多くの経験を持ち、この経験が学習のための貴重な資源となる、④成人の学習への方向づけは、より即時的で、問題解決中心あるいは課題達成中心の学習内容編成がより望ましいという特徴を考慮した授業展開を試みていることを示している。

学習目標3)から7)を達成するために「第6回～第15回：事例を用いた看護過程の展開」について個人ワーク及びグループワークを実施した。第6回から第15回のうち、第14回は実習室において看護計画を実際に行うという技術演習とした。1グループ5名程度とし、個人ワーク及びグループワークにて、提示された事例の患者を対象とし、看護過程を展開した。教員は、グループワーク時、2グループを担当した。具体的には、学生個々が事前学習課題である提示された事例の患者を対象とした看護過程の各段階を展開し、その成果を授業2日前までに提出した。基本的に、事前学習課題の提出については、学生自身が必要と判断した場合、提出するように伝えた。個人ワークの成果を学習資源として、グループワークを進めるため、ほとんどの学生が個人ワークの事前学習課題を提出した。担当教員は、授業日までに、提出された事前学習課題の成果を確認し、学習目標の達成状況を査定し、目標に達成していない学習課題を明確にした。教員は、学生の学習目標達成に向け、明確になった学習課題を克服できるようにグループワーク時にフィードバックした。また、教員は、担当する学生のグループワークの進行状況を観察し、討議が停滞している場合には、しばらく静観した後、質問や発問等の教授技術を駆使して、学生が見失っている学習課題を再確認してグループワークを推し進めていた。また、学生の質問に即時に対応したり、討議内容の方向性を修正したりしていた。担当教員による指導内容や方法に齟齬が生じないように、科目責任者である筆者は、担当以外のグループワークについても適宜、進行状況を観察していた。

これらは、成人学習者の特徴のうち、①人間は成熟するにつれて、その自己概念が、依存的なものから自己管

理的 (self-directing) なものに変化する、②人間は成熟するにつれてより多くの経験を持ち、この経験が学習のための貴重な資源となる、③成人の学習へのレディネス (準備状態) は、社会的な発達課題や社会的な役割を遂行しようとするところから生じることが多い、④成人の学習への方向づけは、より即時的で、問題解決中心あるいは課題達成中心の学習内容編成がより望ましいという特徴を考慮した授業展開を試みていることを示している。

授業全体を通して、「基礎看護方法演習 (看護過程)」の授業内容が、今後の看護学実習の基盤となる重要な知識であることを伝えた。学生は、看護過程の知識が、今後の看護学実習に必要不可欠であることを理解しているため、毎回の事前学習は大変であったが、学習課題に積極的に取り組んでいた。また、事前学習の成果として、学習目標を達成している内容については、肯定的なフィードバックを意図的に実施した。教員からの肯定的なフィードバックを受けた学生は、自分の学習の方向性が適切であることを確認し、さらに事前学習に意欲的に取り組んでいた。これらは、成人学習者の特徴のうち、⑤成人の学習への動機づけは、自尊心、自己実現などの内面的なものがより重要になるという特徴を考慮した授業展開を試みていることを示している。

3 授業評価の結果と課題

平成29年度、「基礎看護方法演習 (看護過程)」に対する学生による授業評価を受けた。授業評価結果は、すべての項目が「当てはまる」「少し当てはまる」に回答されており、平均値が3.4以上であった。特に、「予習復習」の項目は、大学平均値と比較して高い平均値であった。また、自由記述欄には「グループ毎に担当の先生がいたので、質問しやすくてよかった」「課題が大変だったこともあるけど、学習したことが身についたと感じることがあって力になった」「講義でしっかり看護過程を学んでからグループワークを実施したので話し合いながら理解できた」「学習目標が毎回提示してあってわかり

やすかった」等、複数の学生から肯定的な授業評価を受けた。これらは、①人間は成熟するにつれて、その自己概念が、依存的なものから自己管理的 (self-directing) なものに変化する、②人間は成熟するにつれてより多くの経験を持ち、この経験が学習のための貴重な資源となる、③成人の学習へのレディネス (準備状態) は、社会的な発達課題や社会的な役割を遂行しようとするところから生じることが多い、④成人の学習への方向づけは、より即時的で、問題解決中心あるいは課題達成中心の学習内容編成がより望ましい、⑤成人の学習への動機づけは、自尊心、自己実現などの内面的なものがより重要になるという成人学習者の特徴を考慮した授業展開を試みた成果である可能性を示唆する。その一方、数人の学生から「担当する先生によって教え方に差があった」という否定的な授業評価を受けた。現在、基礎看護学領域においては、毎週、授業打合せを実施しており、複数の教員が担当するグループワークの指導内容や方法について共有する機会を設けている。しかし、学生からの授業評価結果を受け、グループワークの指導方法について共有する内容を再検討する必要性を確認した。平成30年度の授業展開に向けた課題として取り組んでいきたい。

引用文献

- 1) Knowles, M.S. 堀薫夫他監訳：成人教育の現代的実践－ベタゴジーからアンドラゴジーへ、33-35, 鳳書房, 2008.
- 2) Knowles, M.S. 堀薫夫他監訳：成人教育の現代的実践－ベタゴジーからアンドラゴジーへ、38, 鳳書房, 2008.
- 3) Knowles, M.S. 堀薫夫他監訳：成人教育の現代的実践－ベタゴジーからアンドラゴジーへ、553-554, 鳳書房, 2008.
- 4) 細谷俊夫編：新教育学大事典1, 「アンドラゴジー」の項, 78-80, 第一法規出版, 1990.
- 5) 江川隆子編：ゴードンの機能的健康パターンに基づく看護過程と看護診断第5版, ヌーヴェルヒロカワ, 2016.
- 6) 看護アセスメント研究会訳：ゴードン看護診断マニュアル 機能的健康パターンに基づく看護診断 原書第11版, 医学書院, 2016.